



七十二源抄
四

特別
二五
2516
3



七十二候鈔



立春初二候氷凍解氷

立春六日月の暮るの暮る方

の暮る方にしてあつともあつたの暮る方なりともあつた
 かやして初のみよりあつた^{んげう}の氷融る清とる
 なるまじやん一候とあつた三候合まじやん一候と
 るる前年の暦目日記に二百六十日一年中七十二候
 ありして二十日ある次の二候蟄虫始振^{テウゴク} 冰の一候蟄
 はあつたと蟄蟄完としてあつたとあつたあつた
 らりらるるまじやんあつたあつたあつたあつたあつた
 あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

後の一候魚負氷上^{テララ} 淮南鴻烈解^リは魚負氷上^{テララ}

29-6595

の属とあるもの事六陽あり地より水面より水はくはく
 かりけんとてけ一候と云ふ事と解ふは其を水はく
 たりある由は鯉鮒の水面より水の上よりなる水
 神の一候瀬糸魚 魚の六甲の中は氣をこまきとありて
 やまぬ物とて水もさうゆへ瀬り池ありて鯉鮒とて
 上水もこれなりゆへさうゆへ瀬り池ありて鯉鮒とて
 とさうゆへにゆへありゆへ瀬り池ありて鯉鮒とて
 淮南鴻烈解云瀬水禽也取鯉魚於水邊
 四面陳之世謂之祭魚
 月令廣義云瀬一各水狗徐氏曰瀬祭圓
 鋪圓者水象也

決父母候雁北 月令廣義作鶴鳥北候
 子とてゆへに尋常海云鳥之味方者趾方近陰
 故不眠而能飛 又云鳥の合陰をてて飛鳥鳴
 とらぬゆへに鳥をてて飛鳥をてて飛鳥鳴
 せとてゆへに鳥をてて飛鳥をてて飛鳥鳴
 ひのゆへに鳥をてて飛鳥をてて飛鳥鳴
 てわつたゆへに鳥をてて飛鳥をてて飛鳥鳴
 三才圖繪云鳥一名朱鳥霜降南翔氷洋
 北徂其性惡熱故中國始温而北至
 後乃居於南 物をてて飛鳥をてて飛鳥鳴
 ①よるゆへのゆへに鳥をてて飛鳥をてて飛鳥鳴

るの()よはよあつわうらうらう

月令廣義云天地氣交泰故草木萌生發動也
スルナリ

響響神の一候桃如華 響響ハ二月の暮此處名
質桃李花也作の二月の暮より三月の暮の桃の花さく
二十日暮花信風といふ事河の比ぶる小を十二月廿
の朔の一候より宵月さるるの二候の三候まで合さく
二十四候ハと百二十日ものびるよるよまた桃の花さく
よさくかの先小葉の一候の梅の花さくよさくかの頃
はさくかの二候より山菜むらさきの二候より山菜むら
さきの

此、事五、雜、俎、録、蟲、海、集、錦、繡、万、花、谷、等、よ、み、え
うらうらとてゆへ今響とて二月の暮よはよの桃
どり初て響なり
ひの倉庚鳴 倉庚ハハシのトカリ章亀經云
倉清也庚新也感春陽清新之氣而初出
故名又曰黃鳥曰搏黍曰黃袍僧家謂金
衣公子其色黼黻又名黼黃をこま書鳴とよ
ねあつもの陽のこのころつくひすくをよのひと
とも陽の響なるゆへ其後あつむらさきとて二月の暮よはよ
やうらうらとてゆへ今響とて二月の暮よはよの桃
どり初て響なり

後の方を化作鳩 鳥の性ハ殺生を好て性陰ハ
さるものなりとてつらあつてのささるもの
陰気の發動するを鳥ハ陽にしてやうか
とつらつらするものもとれ殺生を好て
少くも變化して鳩とせらるるものも鳩の属
ひくもあつるものも鳩とせらるるものも鳩の属
物として鳩ハ化のあるものにして鳩とせらるるものも鳩の属
事詩經にもまゝの儀礼通解にも不仁のもの
仁は化生すしわりの鳥ハ陽氣を運ぶを好て
して多とせらるるもの

月令廣義云鳩即布穀仲春之時執鵠象尚

柔不能捕鳥瞪目忍飢如痴而化故曰鴈

鳩

陸佃埤雅曰蔡邕月令云鷹化為鳩鷹鳥鳩

属也鳩凡五種鷹為鷓鳩應陽而變則啄

柔仁而不鷙

陶弘景曰虎聞声而深伏鷹見形而高飛

鷹鷙鳥也一名鷓鳩左傳曰鷓鳩氏司寇

蓋鷹鷙故為司寇

周礼羅氏仲春獻鳩於國老鄭玄注云以

鷹化為鳩變舊為新宜以養老助生氣

春分玄鳥至

玄鳥ハ二月の中氣のそとハ燕也

あつたううく電初とするもの

清明初の二候桐始華 清明之三月は草木のあたま

と二十日過ぎた後の風の物さそゆをれ一候の梅見

るくくは青くはまののびる三月のさるの秋りて

桐の花の始くさくさる

月令廣義云桐有三種華而不實曰白桐

爾雅所謂榮桐木也皮青而結實曰梧桐

一曰青桐淮南子謂梧桐断角也生山岡

子大而油曰油桐毛詩謂梧桐不生山

岡也今始華白桐也埤雅謂桐與天地合

氣者也今造琴瑟以花桐是白桐也

次の目白回氣化如 回氣者 淮南鴻烈解

船駢鼠とわの多識編よも回氣 駢氣とわの回

氣は法類物をひくたの初こは法のさるのよははの古

中ひをさるのさるの三月は陽氣の下りよははを

さるの目白もわらるのよは法のさるの陽氣は化せ

らるる如く如るの如く陽類 或向回りが回氣の

如くさるのや 目移りてさるのさるのさるの

如くさるの如くさるの自然の如く化さるのさるの如

くさるの如くさるの如く風の類なりさるのさるの如

くさるの如くさるの如く今回氣の如くさるの如

くさるの如くさるの如く今回氣の如くさるの如

回角ののめくじあ〜〜〜陰陽の氣の好
しあ〜〜〜陽の氣の好
とるののめくじあ〜〜〜飛騰す
あはの重〜〜〜
あは地中のあはの飛騰す〜〜〜

注疏曰虹是陰陽交會之氣朱子曰日月
陽一陰〜〜〜
の〜陰氣〜〜〜

兩交天地滯氣也

朱子曰陰陽之氣不當交而交者蓋天地
之滯氣也

理學類編云蔡邕曰陰陽不和而生此氣
異菀曰古者有夫妻荒年菜食而死俱化

成青絳故俗呼為殺人虹
穀雨初の一候萍始生

穀雨三月の甲子の日は
は陽氣の地中より出る〜〜〜

曆解曰萍陰物靜以兼陽也
儀禮通解の鳴鳩而後

其鳴也スルとある所の鳴るの如く田田をかをく一曲農業と
 するものごとけ時よのひひりて鳴鳴るとしてと和ふうら
 てもく和と氏の農業ともくやすたすの
 鳴の有戴勝降桑 詩經鳩の羽は鳩鳴之戴
 勝今之布穀やと何るのは桑の末くの
 こと何るの降との大如て天下の事の降と如し
 りとるの首はびもの桑とまりる降とと桑と受る降
筐れ桑常一とくる桑はのとくくなひくもん
 ひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ
らあとららのびひひひひひひひひひひひひひひひひ
 三才圖繪云戴鶴似山鶴而尾短青色尾

冠俱有文綵如戴花故呼戴鶴又稱戴勝
 之夏秋のひひひひひひひひひひひひひひひひ
とからつとく陰丸下ようとかんすら何るの和と和
形ももるのひひひひひひひひひひひひひひひひ
暮とと昏礼もも昏のひひひひひひひひひひひひひひ
の蝶蛸の蛸と蝶暮らのとわのび二生る陰類の故
よ同お来めく陰丸毎て一月の皆もの鳴と
 廣義云蝶蛸好夜出俗名土狗一名蝶蛸
 一名駟鼠一名敷蝶蛸有耳能不能成一
 技飛不能過屋縁不能窮木勝不能渡谷
 穴不能覆身走不能先人故說文稱駟為

五ノ枝之異^ト且

次ノ又日粒^カ別^カ也

産^ル鳴^ル花^ノ類^ガ陰^ニ於^テ其^ノ粒

物^モ又^シ陰^ニ於^テ其^ノ粒^カ別^カ也

毎^レ一^ト陽^ニ於^テ其^ノ粒^カ別^カ也

粒^カ別^カ即^チ地^ノ竜^一名^ク曲^ク蟪^ク曆^ク解^ク曰^ク陰^ニ而^シ屈^ス者

乘^リ陽^ニ而^シ伸^ス見^ル也

後^ノ又^シ日^ノ粒^カ別^カ也

其^ノ多^ク織^ル編^ル也

其^ノ多^ク織^ル編^ル也

其^ノ多^ク織^ル編^ル也

其^ノ多^ク織^ル編^ル也

瓜王



淮南鴻烈解云王瓜色赤感火之色而生
圖經云王瓜生干野田沃墻垣葉似栝樓
烏茶圓無了缺有毛如刺蔓生五月開黃
花花下結子如彈丸生青熟赤根似葛細
而多糝又名土瓜一名落鵝瓜鄙去以為
草藨本草作菝葜陶隱居非之蓋二物異
種也

小海初の一候若葉秀小海八月中秋の若葉
の葉の事乃の若葉といふの味乃の苦葉といふ事乃の
若葉の事乃の若葉といふの味乃の苦葉といふ事乃の
若葉の事乃の若葉といふの味乃の苦葉といふ事乃の

埤雅曰茶若菜也苦菜生於寒秋經冬歷
春至夏復乃秀月令孟夏苦菜秀即此是也
此草凌冬不凋故一名游冬凡此則以四
時制名也

次のあり靡草枯 五雜俎曰靡草薺菀莖
薺之屬非下草也薺菀似人參冬水而生
其土而死乞其乃のてを靡草といふ事乃のて
を其乃のてを其乃のてを其乃のてを其乃のて

方氏曰凡物感陽生者疆而感陰生者柔
而靡靡草則至陰所生也故不勝陽而死

後のつらまを食す。やまを秋の百穀みのの穂する阿るの
ひ時なるものもまは阿るて穂なるものひ月ま
秋のつらもの

芒種初候蟬始生。芒種六月のまはれ名は阿るの
しものつらものひ月まは阿るの穂なるもの
故に物よひつらものひ月まは阿るの穂なるもの
つらものひ月まは阿るの穂なるもの
法の氣を感動して蟬始生す

月令曰、蟬、蝗、生、蓋、見、升、陰、始、起、殺、蟲、應、而
生、焉、爾、雅、正、義、云、蟬、蝗、深、秋、乳、子、至、其、之
初、乃、生、是、也

廣義云、蝗、蝗、飲、風、食、露、感、一、陰、之、氣、而、生
能、捕、蟬、又、名、殺、蟲、又、曰、天、鳥、言、其、飛、捷、如
鳥、也、深、秋、生、子、于、林、木、一、穀、百、子、至、此、時
破、殼、而、出、菜、中、謂、之、螻、蟧、生、于、桑、者、佳
次、の、み、鶉、始、鳴、鶉、も、又、法、也、故、よ、ひ、つ、ら、の、と、梅、く、
物、と、害、と、此、の、み、は、梅、く、鶉、つ、ら、の、梅、く、
乃、氣、を、感、動、し、て、鳴、る、の
三、才、圖、繪、云、鶉、伯、勞、也、以、五、月、鳴、應、陰、氣
之、動、陽、氣、為、仁、陰、氣、為、殘、賊、伯、勞、賊、害、之
鳥、也、其、聲、鶉、々、故、以、為、名、之、
法、の、み、は、無、麥、及、舌、び、も、く、の、つ、ら、を、辨、と

廣義云 蝸蟬之大 而黑色者 按蟬乃 總名
鳴 于 夏 為 蝸 鳴 于 秋 日 寒 蝸

後のふりよ 蝸くすまなり 回自 蝸くすまなり 蝸の半に
けまなり ゆまなり 蝸くすまなり

小暑の候 温風時 至 小暑の六月の暑なる 温風

氏 春秋 淮南子 六 温風始 起 暑とあり 今 細く 温風を

考ふ 小暑の 温風 始 起 暑とあり 今 細く 温風を

考ふ 小暑の 温風 始 起 暑とあり 今 細く 温風を

考ふ 小暑の 温風 始 起 暑とあり 今 細く 温風を

考ふ 小暑の 温風 始 起 暑とあり 今 細く 温風を

考ふ 小暑の 温風 始 起 暑とあり 今 細く 温風を

考ふ 小暑の 温風 始 起 暑とあり 今 細く 温風を

考ふ 小暑の 温風 始 起 暑とあり 今 細く 温風を

考ふ 小暑の 温風 始 起 暑とあり 今 細く 温風を

考ふ 小暑の 温風 始 起 暑とあり 今 細く 温風を

考ふ 小暑の 温風 始 起 暑とあり 今 細く 温風を

考ふ 小暑の 温風 始 起 暑とあり 今 細く 温風を

考ふ 小暑の 温風 始 起 暑とあり 今 細く 温風を

考ふ 小暑の 温風 始 起 暑とあり 今 細く 温風を

考ふ 小暑の 温風 始 起 暑とあり 今 細く 温風を

考ふ 小暑の 温風 始 起 暑とあり 今 細く 温風を

唯南子一宿腐る化者新と云々の

汝のあり古洞傳と云 汝のあり花古洞の中より洞古

のあり傳と云 汝のあり花古洞の中より洞古

わびしきもの

汝のあり古洞傳と云 汝のあり花古洞の中より洞古

すは時古の旺と云 汝のあり花古洞の中より洞古

ありぬれをよと云 汝のあり花古洞の中より洞古

と秋初の一候涼風と云 汝のあり花古洞の中より洞古

風が好くはる秋の涼と云 汝のあり花古洞の中より洞古

汝のあり古洞傳と云 汝のあり花古洞の中より洞古

汝のあり古洞傳と云 汝のあり花古洞の中より洞古

汝のあり古洞傳と云 汝のあり花古洞の中より洞古

汝のあり古洞傳と云 汝のあり花古洞の中より洞古

汝のあり古洞傳と云 汝のあり花古洞の中より洞古

汝のあり古洞傳と云 汝のあり花古洞の中より洞古

汝のあり古洞傳と云 汝のあり花古洞の中より洞古

汝のあり古洞傳と云 汝のあり花古洞の中より洞古

汝のあり古洞傳と云 汝のあり花古洞の中より洞古

汝のあり古洞傳と云 汝のあり花古洞の中より洞古

汝のあり古洞傳と云 汝のあり花古洞の中より洞古

汝のあり古洞傳と云 汝のあり花古洞の中より洞古

汝のあり古洞傳と云 汝のあり花古洞の中より洞古

汝のあり古洞傳と云 汝のあり花古洞の中より洞古

汝のあり古洞傳と云 汝のあり花古洞の中より洞古

土原の中へ殺すはの甲乙はくんとくことをも殺るる
 とすつらとくしる者命をたぬる令て初くんと刑戮を
 とすりて殺るるのさあまよふを殺戮とすとの初を
 廣義云鷹義禽也秋金為義金氣肅殺鷹
 感秋氣始捕擊必先祭之猶人飲食必先
 祭祖也不擊有胎之禽故曰義
 淮南鴻烈解云捕鷲殺鳥於木澤之中曰
 面陳之世謂之祭鳥始行殺戮順秋氣也
 次の初天純始信肅 秋を殺戮の氣とすつら
 本もつら初の事あつらつら初の初は初て天
 初く物とすつら初の初とつら初の初

後の初木乃登 後の初木乃登とてこの
 木乃登殺の初とすつら
 白露始一候鶴居來 白露八月の初とすつら
 鶴居る水濱の中より南へ飛來つら
 後の一候言を海 言を六月の中とすつら
 後園より鳥の初秋分の初とすつら 後園の鳥を園か
 つら初
 後の一候言鳥養羞 群鳥を冬月とすつら
 言の初とすつら初の初とすつら 淮南子の解
 言の初とすつら初の初とすつら 秋の初とすつら
 言の初とすつら初の初とすつら 初の初とすつら

しんかきしんかき

秋分始の一候霜乃收露ヒキカム 秋分八月中氣の初なる
費六陽初なる日日月陰陽ありてさうんかん陽の陰分
に并らうらうら日一雷乃初なるキコト 秋分一候
陰分一候陰分始なり 陰分と陽分とさうんかん
ありてさうんかんを官たんよさうんかん
さうんかき

涼の一候水始テ凍 水乃と氣のさうんかん
はあきさうんかんありて秋分をさうんかん
るなくあきさうんかこの日一は後の一候の初なる
かきさうんかん

寒露初の一候始なる寒露 寒露九月の初なる
ある雁の母の父母の九月の初なる父母の
はあき八月の初なるの初なるの初なる
て八月の初なるの初なるの初なるの初なる
とさうんかこの日一は初なるの初なるの初なる
いさうり

通書作來濱濱水際也
次の一候葎入大水化為蛤 葎ハ陽をさうんかん
とさうんかんをさうんかん
方氏曰爵陽類也蛤陰類也戌亥者陰之
極也故秋則爵入大水為蛤

二二候抄

十一

五雜俎云やむれん常以これを見らば多秋よむること
に雀千百りとしむれん今もそのけりしは雀の如し
うしろしめすのまゝなり三回なよむと海鳥に八咫鳥
とも冬月又雀うさむれん此雀す所の雀又さし
特別あり

許叔とまゝなる鳥居事しむる一と一と賓の事
雀は多しつひと賓雀老雀やと註ふこと雀豹古
今註雀一名嘉賓とあるの許叔の註にまゝなり
賓雀老雀なるはつひと海鳥に今も老雀と
るの海鳥に今も雀とあるはつひと雀は雀と
雀とるの雀の雀化しつひと雀の雀とあり

五雜俎曰雀入大水為蛤北方人常習見
之每至季秋予百為群飛噪至水濱簸蕩
旋舞數四而後入其為蛤與否不可得而
知也然冬月何嘗無雀或所愛者又一種
耶
又云淮南子季秋之月鴻雁來賓雀入木
水為蛤注云來賓者以初秋先來者為主
而季秋後至者為賓也許叔重解以雁來
為句而曰賓雀者老雀也棲宿人家如賓
客
後の一候菊有萋色 菊は多しつひと

菊の死つりて色をぬく今菊の
秋の氣令つる今も色をぬく
今菊の死つりて色をぬく今菊の
秋の氣令つる今も色をぬく
今菊の死つりて色をぬく今菊の
秋の氣令つる今も色をぬく
今菊の死つりて色をぬく今菊の
秋の氣令つる今も色をぬく

霜降始 一候 豺祭獸 霜降の月の中野のさく

豺の性もけく多し其のさくは秋のさり
今も秋の肅殺とてさくす豺の祭の時
は氣は
ては月けものさくす
とて豺の祭の時とてさくす

廣義云 古人以豺祭獸然後田獵蓋干禽

獸每不忍殺又惟肅殺之時豺獸自相食

此時取之

次の一候 菊の死つりて色をぬく
今菊の死つりて色をぬく今菊の
秋の氣令つる今も色をぬく
今菊の死つりて色をぬく今菊の
秋の氣令つる今も色をぬく
今菊の死つりて色をぬく今菊の
秋の氣令つる今も色をぬく

後の一候 蟹の死つりて色をぬく
今蟹の死つりて色をぬく今蟹の
秋の氣令つる今も色をぬく
今蟹の死つりて色をぬく今蟹の
秋の氣令つる今も色をぬく
今蟹の死つりて色をぬく今蟹の
秋の氣令つる今も色をぬく

物づくをわらうもの

次の方地振凍テ 宇治のなまきりよりいゆへに比の陸

宇治のなまきりよりいゆへに比の陸

後の方雅入テ 大島ニ 磨ミツキ 磨ミツキ と大輪フニ とするあり

その方人ハ 磨ミツキ と同じくは、ミツキ 磨ミツキ の方人ハ 磨ミツキ

その人ハ 磨ミツキ と同じくは、ミツキ 磨ミツキ の方人ハ 磨ミツキ

の方人ハ 磨ミツキ と同じくは、ミツキ 磨ミツキ の方人ハ 磨ミツキ

の方人ハ 磨ミツキ と同じくは、ミツキ 磨ミツキ の方人ハ 磨ミツキ

の方人ハ 磨ミツキ と同じくは、ミツキ 磨ミツキ の方人ハ 磨ミツキ

の方人ハ 磨ミツキ と同じくは、ミツキ 磨ミツキ の方人ハ 磨ミツキ

の方人ハ 磨ミツキ と同じくは、ミツキ 磨ミツキ の方人ハ 磨ミツキ

あつたを地ミツキ の方人ハ 磨ミツキ

あつたを地ミツキ の方人ハ 磨ミツキ

あつたを地ミツキ の方人ハ 磨ミツキ

あつたを地ミツキ の方人ハ 磨ミツキ

あつたを地ミツキ の方人ハ 磨ミツキ

あつたを地ミツキ の方人ハ 磨ミツキ

あつたを地ミツキ の方人ハ 磨ミツキ

あつたを地ミツキ の方人ハ 磨ミツキ

あつたを地ミツキ の方人ハ 磨ミツキ

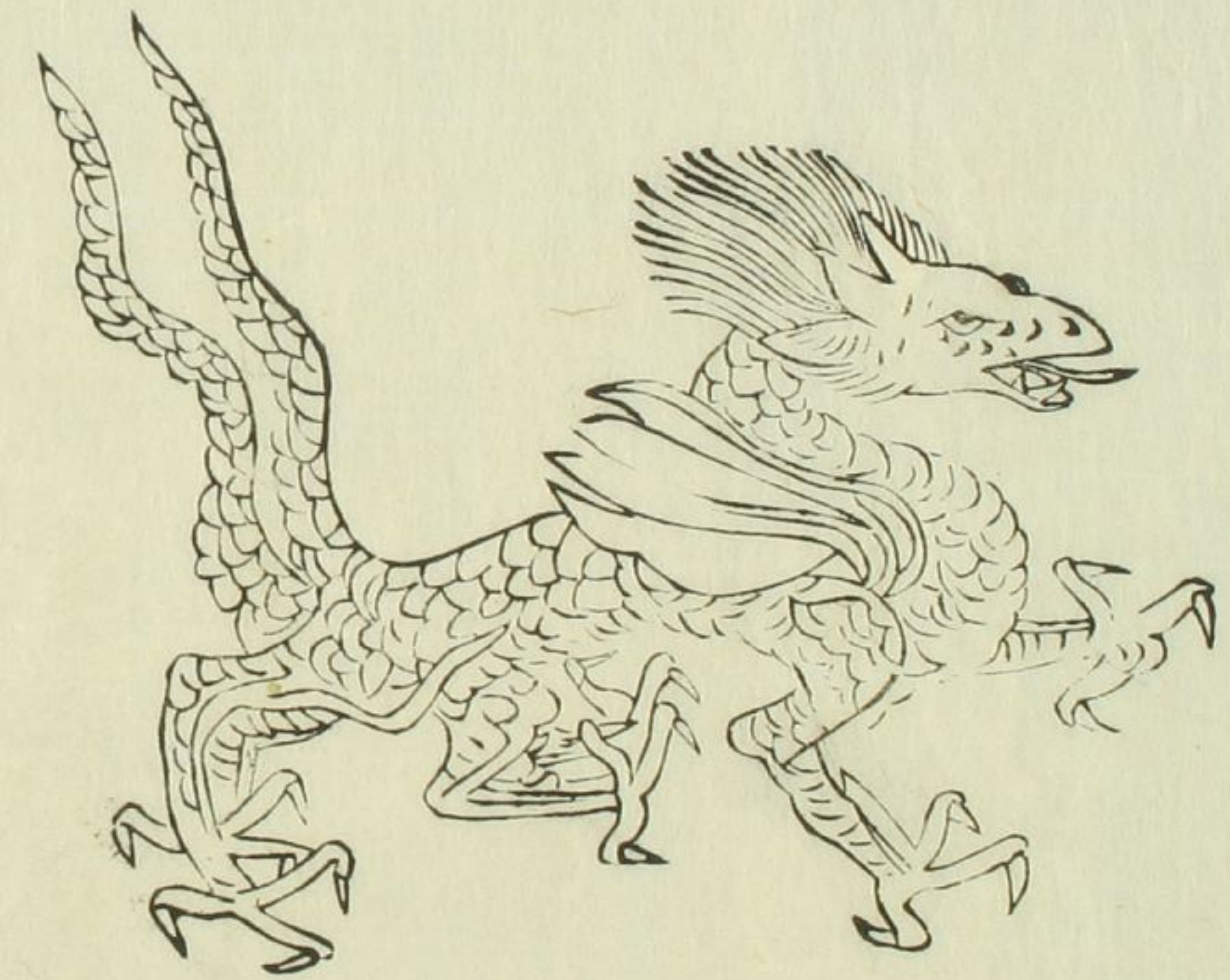
あつたを地ミツキ の方人ハ 磨ミツキ

あつたを地ミツキ の方人ハ 磨ミツキ

あつたを地ミツキ の方人ハ 磨ミツキ

あつたを地ミツキ の方人ハ 磨ミツキ

蜃



爾雅曰蜃小者玼是以蜃為蚌屬
 羅願曰蜃大蛤也故海中車螯亦有謂之
 蜃者然古人較蜃同稱若蚌蛤屬豈能變
 化為人害
 陸佃埤雅云蜃形如蛇而大腰以下鱗盡
 逆
 五雜俎曰雉入大水為蜃雉本蛇所化晉
 武庫中雉飛而得蛇是也則入水為蜃
 亦從其類耳
 小名初の一候虹霓也
 小名十月の中名の名の
 虹六陰陽のしつらるるのび月六陰分のたて陽るるん

と考ふるより白く花中に出るといふに母は蘇海にも走
 獣伝は屬すとあり或は虎の好いゆくして地を敷
 雲の如くもさあてんとするはあつたきはつらん
 と此花中に花とあつるといふことなるなり
 後の一候菫すずめい類あつ 菫すずめい類毎々今のら利糸也
 文よりと菫すずめいの角カクに似て根もさつらんのとありの月令廣
 義節東成菜菔カク甚高誘り筆は鳥菫カクとありの場カクの
 ぶんがさつらん 挺カクあつと生つらん

菫



二十四

三十四

廣義云本草謂荔為蟲實即馮薤カキナ鄭康成
蔡邕高誘皆然說文云荔似蒲而小根與
本草同但陳皓注為香草附和者即以為
零陵香殊不知零陵香自生于三月也
其玉和の候ササ判結ス 其其十月申の氣の名之判結
純陽の氣を感しく地よりつるものなり月陽
の氣すともとも陽微弱之故よそのものなりと
ひすやとぬぐゆり
其の候麋角解ハ として麋鹿の角を解ゆる
ものなり麋のけ月微陽の氣を感して角を解
す麋鹿角とゆすすものなり角を解くものなり

坂の候の氣動カ 其氣動五天一ありとせしめて
其陽のけをさるものなり月一陽を守故に陽を
てあつらうもの
小を其の候馬北郷ヒノ 小を六十月の氣の
を其の候にひくく其れんものなり
其の候の氣をさるものなり故よそのものなりとせしめて
ものなり郷の氣をさるものなり其れ南をへ其れ
ては月神のけをさるものなり
其の候鶴如鳥巢カ 鶴陽をさるものなり
うくものなり故よそのものなりとせしめて
其れ樹とよ葉くものなり

後のみち雉時ニナリ 雉ハ陽鞠ニナリのりとも飛ニナリるの河の
てうらうらうと大のみのよのころの頃のわが陽
のいよとさうなるがよも陽に感動ニナリく物と
雖ナヒてもニナリ鳩ニナリとニナリしニナリじニナリや 詩曰雉之朝ニナリ雉ニナリ尚ニナリ来ニナリ其
鳩ニナリとあるの
大寒初の一候鶏始乳ニナリ 乙未年十二月の甲子の日
鶏ハ陽鞠ニナリとみりし中も鳥とぬくやうな物ありけ
るは鶏も鳥も鳥のらるるやして物のみは
てつらみくまをに受けてもせがすもの
此の一候征鳥ニナリ疾ニナリ 臨ハ肅殺の令とつとる
るの秋やよりの後まひひ日ニナリのつらみく

雉の教ののりとのりてそまなはくやのり
とくおとみのわらうもなるとし海とそ征鳥ニナリ鳥の
るは儀礼通解の註云征鳥ニナリ齊人謂之擊征
或曰鷹ニナリとあるなり
後の一候伏臘ニナリ堅ニナリ凍ニナリ 初冬にわらうとつとる
あまのころすくさるる後のわらに受けて比はるは
のさるにわらく氷のよくわらうとつとる

或曰七十二候者年中氣令不可不知者也况旋屬圖畫之而在皇邸在櫛子所目覩徃々有之然不知其理何如矣茫乎如向若願乞以倭字註解之曰予早陋何罄其覓乎或乞不輟故不能固辭終採拾台人言而述其大槩合迨歲時故實條錄之而為世人談具一日書堂白水來予館餒梓求板行之予睨之曰於戲汝林氏欲旌吾瑕釁耶然於亥理之物十而知其一二亦勝愚而輟見者庶乎以燕相舉燭為舉賢之辨學者亦幸莫訝倭字焉貞享丙寅

